

13. 大正時代

明治時代の次の時代は、大正時代（1912～1926年）で、民主主義の考えにそった改革が政治・文化・社会の面で試みられました。

こうした社会の中で全国的に広がった騒動に、門司の地もまき込まれるという一面がありました。

明治	大正	昭和
	1912	1926

(1) 門司の米騒動

「いったい、どうなってんのや。今年に入って、米は値上がりのしつづけじゃねえか。」

「軍隊を送るちゅうても、その軍隊が門司の米を全部持っていくわけでもないのによ。」

「シベリア（ロシア）への出兵にかこつけてよ、悪徳商人が米の買い占め・売り惜しみしとるんじゃ。このまんまじゃ、すまされんわい。のう、みんな。」

「そげな家をぶっ壊してでも、元の値段以下に値下げさせてやる。じゃろうが、みんな。」

大正7（1918）年の6月頃、門司港地区のごんぞうと呼ばれた労務者たちなどは、日を追って目まぐるしくつり上がっていく米価（米の値段）に不安といらだちをつのらせていました。

なぜ、このようなことになってしまったのでしょうか。

実は、前年の大正6年に米一升（約1.5kgの量）が28銭（0.28円）だったのが、翌年の1月では29銭とわずか1銭の値上がりだったのに、この6月には33銭5厘と約1.2倍に値上がりしたからなのです。

大正5年6月	16銭5厘
6年10月	28銭
11月	29銭5厘
7年1月	29銭
5月	32銭
6月	33銭5厘
7月	34銭
8月1日	36銭8厘
4日	37銭5厘
9日	42銭8厘
14日	55銭

※1円=100銭=1000厘

門司の米価（一升の小売り値段）

なのです。

それは、時の政府が軍隊をシベリアへ送るといううわさを聞いた米問屋や商人が、一儲けしようと思い占めや売り惜しみをしたことによって、米がゆきわたらず不足し、値上がりしてしまったからです。

うわさはうわさではなく、本当に出兵が決定したため、信じられないほどの値上がりをしていきました。

左の表の特に大正7年8月に注目しましょう。14日にはとうとう55銭となり、これは前年10月の28銭に比べると約2倍、2年前の大正5年6月の16銭5厘に比べると約3.3倍ということになります。

第一次世界大戦に日本も米英などの連合国側に味

方した頃から諸物価が値上がりする中で、主食の米が異常に値上がりすることは、当時の門司市民の多くに不安を感じさせる重大な関心事だったのです。この米価の動きと人々の不安は、全国的なものでした。

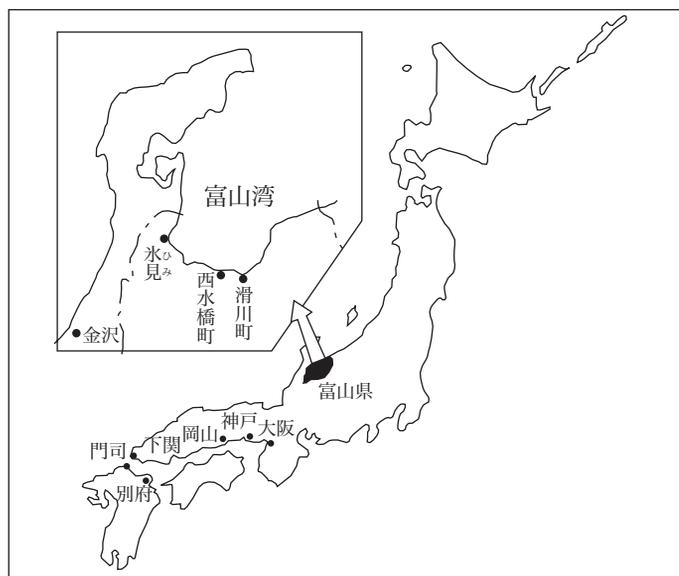
日本で最初に怒りとなって爆発した所が、富山県中新川郡西水橋町なかにいかわにしみずはしでした。

米の異常な値上がりにも怒った西水橋町の漁師の妻たち約300人が、米の値下げを要求して、8月3日に米屋を襲ったのです。

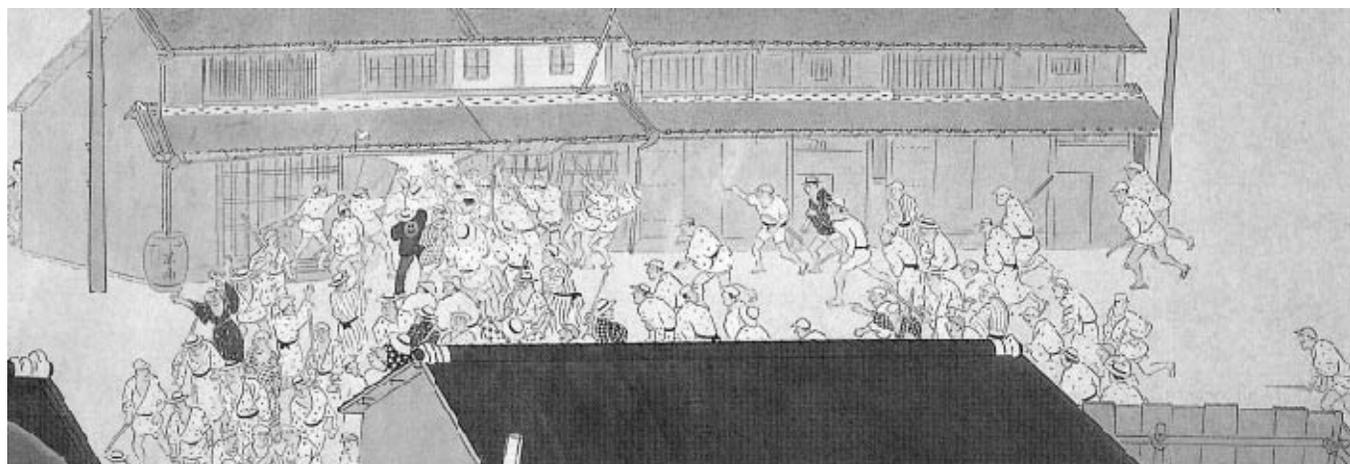
これをきっかけに、9日には岡山、11日には大阪、12日には神戸、そして13日には下関市や別府町（今の別府市）へと広がっていきました。

このような全国的な騒動の中で、8月11・12日に、小倉の第12師団は、一部の将兵を残して門司港から船出し、14・15日にシベリアのウラジオストクに上陸しました。「シベリア出兵」です。

「わしらごんぞうは、一日働いて賃金は90銭。女・子どもは50銭にもなりやらん。米が一升



米騒動の発火点



当時の様子を今に伝える「米騒動絵巻」(教育同人社 6年 社会科資料集)

55銭の今じゃ、^{まきだい}薪代も野菜代も出せやせん。魚一匹すらも食えんとぞ。」

「うわさじゃがな、神戸や大阪では派手に騒ぎよったというこっちゃ。そして、米を相当に値下げさせたちゅうことや。ついでじゃというて、悪の商人どもの店や家を打ち壊したり、焼き打ちしたりしたちゅうこっちゃ。」

「わしらも立ち上がって、かあちゃんや子どものためにも米を下げささんと、ごんぞうとしての男が立たんぞよ。」

門司港のごんぞうの日給は、平均して92銭。女・子どもの場合は48銭だったそうです。

当時、成年男子は一日に一升の半分の5合^{ごう}(0.75kg)の米を食べたということです。また、家族は5人から7人ほどだったので、一日の稼^{かせ}ぎでは米代にもならず、おかずは塩だけということにもなりかねませんでした。

ごんぞうたちの仕事は、晴天・雨天・台風といった天候などに左右され、月の半分くらいしか仕事にありつけなかったのが実情でした。ですから、米の値上がりは命を奪^{うば}うことと同じだったのです。

では、富山県から広がった米騒動は、わたしたちの門司ではどうなったのでしょうか。

大正7年8月11日付の「門司新報」(当時、門司にあった新聞社)は、次の記事^のを載せています。

元来、労働者賃金の標準は米価なるに、^{さくこん}昨今の白米小売相場は一升四十七銭の高価なるを以て、如何にも安く、米二升の要求^なを為すが例なり。従って、九十銭以上日給に^ある者は壯者に非ずして、少年か老人かの弱者なり。

- 意味→元々、労働者の賃金は米の値段が元になって決められているが、最近の米の値段は一升が47銭という高さにあって、これからみると今の賃金はあまりにも安い。だから、米二升の代金に見合う賃金を要求するのは当たり前である。一日の賃金が90銭にならないような仕事につくのは、少年とか高齢者といった弱い立場の人たちである。

上の記事が「門司新報」に載って3日後の14日に、^{ふおん}不穏な動きを心配した門司署長は、市内の米屋に値下げを働きかけ、米一升を35銭で売り出させました。当然のことながら、米はたちまちのうちに売り切れました。おさまらないのは、行列になって順番を待っていた人々です。

「米をかくすな!」「売り惜しみをすんな!ただじゃすませんぞ!」などと、怒りの声を上げました。

この様子を見ていた警察隊は、打ち壊しなどの騒ぎになってはいけないと判断し、群衆を解散させました。

米商人たちも、人々のいらだちが打ち壊しや焼き打ちへと広がっていかないと心配して、^{たが}互い

に連絡し合って、「明日からは今日より10銭の値下げをする」と申し合わせました。

翌15日、市内の米屋は一斉に店を開けました。米はどの店でも一升を25銭で売り出しました。ところが、それほどの値下げでは、人々の怒りをおさえることはできませんでした。逆に、その値下げがかえって怒りを高めてしまったのです。

「今まで55銭で売っていながら、半値以下の25銭とはどういうこっちゃ。」

「25銭でも米屋が損はしないからじゃろが。昨日は、それでも10銭も儲けやがった。」

「そや、そや。いくらでも米は安くなるんや！」

この夜、当時、稲荷座という劇場があった場所あたり（門司区東門司）に集まった群衆は、米屋や酒屋などに乱暴をはたらきました。



最初に群衆が集まったところ（「稲荷座」という劇場があったところ）

怒りはますます高まる一方でした。さらに群衆は、「悪徳商人をやっつけろ。」とか「今こそ商人どもに恨みつらみの恐しさを見せてやれ。」などと叫びながら、田野浦・旧門司方面にもくり出して行きました。

「海岸の米倉庫へ行こうぞ。まだ、何千何百俵（一俵には60kgの米）もの米がうず高く積まれているというぞ。」

米を米俵ごと運び出そうというのです。

16日の夜、自然にふくれあがった約3000人の群衆は、旧門司海岸沿いにある米倉庫を次々に打ち壊しては米を奪いました。そして、さらに錦町、葛葉、小森江にも打ち壊しの手をのばしました。

「わたらの腹の虫はこれでおさまるわけじゃねえんだ。次は門司港岸壁や。押し寄せて、倉庫が

ら米を運び出せ！」

「うおーっ。」という叫び声とともに、群衆は門司港駅の方へ大きな動く塊^{かたまり}となって駆^かけて行きました。

騒動の火の手は、その日の夜中近くになっても鎮^{しず}まる気配^{けはい}はありませんでした。

17日となった午前2時頃、とうとう小倉の第12師団の留守部隊が出動し、武力で群衆をおさえました。

「ちくしょうめ！鉄砲玉には勝てっこねえや。」

「鉄砲じゃ話にならん。やめ時かもしれんな。」

いきり立った群衆も散って行き、騒動はいったんはおさまりましたが、兵士たちが自分たちには鉄砲の筒先^{つつさき}を向けないことを知った女・子どもたちは、17日の朝も明けないうちから米屋に押しかけました。

連日の打ち壊しに恐れおののいていた米屋は、ぐっと値下げして、米一升を15銭ほどで売り、難^{なん}を免^{まぬが}れました。

「やったぞ！悪徳米屋^{ひとあわ}に一泡も二泡もふかせてやったぜ。」

「べらぼうな商^{あきな}いはもうできんやろ。胸がすっとしたぜ。」

8月14日から17日の4日間にわたった騒ぎを、「門司の米騒動」といいます。この騒動で、米屋46軒、酒屋34軒をふくむ173軒の商家が打ち壊しにあいました。そして、騒動をあおったという罪^こで、300人を超す市民が警察に逮捕^{たいほ}されて、決着がつきました。

14日に門司で起こった米騒動の市民怒りの火は、16日には戸畑、17日には田川郡、20日には筑豊へと飛び火していきました。ところが、小倉・八幡・若松では、ついに騒ぎは起こりませんでした。

それは、門司での騒動が連鎖^{れんさ}しないようにと、米の安売り、他の郡市からの市の米の買い付けで不安をやわらげる一方で、軍隊や警察による万全の警備など、役所が事前に有効な手立てをしていたからでした。